

実朝の歌碑

実朝の歌碑のあたりの夕間暮れ空には淡き月と星見ゆ

弁慶

月が蒼いことを理由に遠回りこころ蛙の鳴く畦道を

たまこ

たちまちに風紋見ゆる一面の青田になりて梅雨を待つなり

蘇生

風紋のクツキリ残る砂山に君と座りしあの日懐し

弁慶

風紋を踏む愉しさに歩きたり春の海まで言葉もなしに

たまこ

梅雨入まへ磯の香立ちし砂浜にゴミを集める重機走りぬ

蘇生

ほんのりと磯の香りの芳ばしく浅草海苔を焙るうれしさ

弁慶

射すやうな光線になれば穴子の匂たのしみたのしみ味も匂ひも

たまこ

白焼きの穴子を美味しく戴いて庭を見やれば蛍飛び交う

弁慶

江戸前に獺猛果敢な肉食魚 穴子食ひをる紅唇皓齒

深海鮫鯨

甘えてゐるのかと思へば嘸みついてこの性分は飼ひ主に似る

たまこ

愛に憎樂に苦ありと先人の呻きに永久に陰と陽あり

蘇生

過ぎし日の君の笑顔を思い出す激しき雨音一人聞く夜

弁慶

雨晴れて身はひとりなり鳥の声呼びあふ樹蔭の眼に沁む緑

深海鮫鯨

片身なる貝は哀しやいつの日かひとりのうたの迫りてしみる

れん

「ケイタイ」と言ふ貝パタンと閉じて待つ着信音の「トロイメライ」を

たまこ

ぱたぱたと煽ぐ扇に香あり秋扇夏にシャネルを送る

深海鮫鯨

磯の香の砂に杭打つ音続き海の家へと躯体くみ上ぐ

蘇生

海風に赤き氷菓の旗なびく片瀬江ノ島湘南の浜

弁慶

赤き陽に赤きイチゴのかき氷グラスに残る赤き口紅

深海鮫鯨

すなおか
砂丘を下れば黒潮潮に乗せ小瓶を流しき手紙を入れて

たまこ

椰子の実が昔着きたる海浜にポリの容器が山になる今

蘇生

椰子の実の着きし砂浜伊良湖崎沖を流るる黒き潮よ

弁慶

中田島砂丘に立ちしスナップのとおき日かへるみな若かりき

れん

ミュンヘンの若人集うFIFAの火蓋切らるる六月九日

蘇生

ベッカムの右足シュート絶好調スタジアムゆれ興奮の渦

くりおね

遠国の競技の庭に翻る日の丸の旗の多くあれかし

弁慶

天高くボールを蹴れば月となり見よゴールには朝日ころがる

深海鮫鯨

茶髪でもサムライブルーは日本らしトリニダード・トバゴは地図のどこなの 真奈

ナビゲーターにわが家への道を映しだせば旅ゆく気分そよぐ卯の花

たまこ

ナビゲーター狂いしボールは食われけりアリゲーターかかのキーパーは

深海鮫鯨

さむらいの八十余分の勝ちゲーム三太刀あびて血にまみれたり

蘇生

月代の青き武士負けにけり乾坤一擲クロアチア戦見よ

弁慶

ネクタイはクロアチアより広まれりフンドシ締めよ大和魂

深海鮫鯨

愛国心なんかじゃないさ若者の真剣勝負が楽しみなんだ

雛菊

美しい日本と思ふ一面の水田に早苗の緑がそよぎ

たまこ

この景色美しいとは思うけど人心だけはわからぬものよ

中澤優希

風光に国籍はなく美しくモナリザの背にイタリアの空

深海鮫鯨

海外へ行かなき吾のをもひでよ京都でありにきルーブル展はも

れん

わが家の軒に育ちし燕の子のたちゆく国を思へばたのし

たまこ

早起きの燕の声の破る夢 巫女は飛びゆく壺中の外へ

深海鮫鯨

四時起きの最後の聖戦敗れたり眼に鮮やかな口ナウドとジーニョ

真奈

鼻屑目を捨てて見えたるひ弱さに茨の道よ南アFIFA

蘇生

ドイツより悲報は届くあさばらけ我は滂沱の涙、涙よ

弁慶

絶叫し涙を流す戦がワールドカップなるに安堵す

たまこ

横雲の途絶えし空の彼方には多摩川越ゆる朝虹の影

弁慶

連綿と日々十年の増伴の夏越被いは草田男の句に

蘇生

六月の別れ惜しみて一盞をボンボワイヤージユのエル贈らん

真奈

夏富士やあまなく高き朝の空今年も半ばを過ぎ行かんとす

弁慶

春待ちてたちまちすでに夏がきて母亡き日々の早も過ぎ行く

蘇生

流れ行く夏の小川の音さやか合歓の花咲く林間の道

弁慶

ながれゆくゆくすへしらにさだめなし^{そら}宙とも海ともそのはたてはも

れん

青紫蘇も茗荷もふくふく育つてるそつめん流しの夏が来る来る

雛菊

稲庭のうどん食べつつ遙かなる小町の里の夏を思えり

弁慶

数日の涼しき風の梅雨晴れに明けて日盛る暑さを思つ

蘇生

層雲のへりに残れる夕茜消えやらず暑き幾夜かがなべ

かわせみ

十年のえにし嬉しき増伴につごと百余の見知らぬ笑顔（増伴記念会合に寄す）

蘇生

生きるとは楽しむこととされば鳴くこの現世の法師蝉かな

やんま

雲早し箱根の山の蝉時雨宗祇の墓も賑わいにけり

弁慶

箱根なる山たかきの薄曇りああ暑かりききのこの都会 れん

熱きもの賜わりて今血に肉に染みわたり行く音心地良き 寂

ひたぶるに小さきことに推くさへ安けき日々の礎ならん 蘇生

いと小さき声にこの耳傾けて無事に無心に過ごす夏安居 丹仙

滝水に打たれて一人経を読む夏安居の僧の白き衣よ 弁慶

しとしと幾日も絶えぬ青梅雨に午前六時の鐘もくぐもる 蘇生

家族四人まくら並べて旅の宿瀬音に混じる雨音を聴く 雛菊

雨脚の遠離りゆく広き野の果てにありけり足柄の山 弁慶

このとしの蓮の花はおそかりき今ぞさかりを雨の降りつぐ れん

少年の壁当てテニスきりもなや柵の昼顔人知れず咲く やんま

日次にていよよ咲きつぐ凌霄花廃家の垣を越えて乱るる 蘇生

廃校の庭に昼顔咲きにけり文月の風穏やかに吹く 弁慶

級友に再会約し安房を発つ安房の潮騒胸奥に秘め 寂

その昔読みし里見の八犬伝黒潮流るる安房の国かな 弁慶

三浦から指呼とも見ゆる房総の鋸山に懸かる梅雨雲 蘇生

その昔登りし安房の鋸山眼下に渦巻く走水の海

弁慶

日傘手に別れし人のまなざしに蓮のつぼみの揺れたもつなり

くりおね

イベリアの旅の棹に思い出の炎暑果て無き黒き向日葵

蘇生

戦争で引き裂かれたるひまわりよソフィアローレンの野生美し

雛菊

さかれたる絆もすでに遠くして帰すべきもののさらだにとおし

れん

朝鮮やドイツの過去を思うときわれらの幸をしみじみ思う

蘇生

神風や海の女神に守られて大海原に浮かぶ楽園

くりおね

わたつみの神より届くふみ束はすめらみくにの今や如何と

真奈

この國の未来は暗し八月の第三の火は天より墮つる

丹仙

かの八月防空壕を躍り出てひもじき日々も幸を知りけり

蘇生

ヒロシマで捕虜米兵も死んだこと知るすべもなきふるさとの母

真奈

都幾川の静けき辺ひろしま忌時を刻みし老鷲の音

文枝

立秋を過ぎしこの朝忽然とはたた神なり黒き雨ふる

丹仙

反旗とは無念至極に御座候暗渠に黒き翳深くして

真奈

明らかにあらざる翳のさざに奥はたてにありしそはなになるや

れん

鳴く蝉は翳を慕ふか最奥の木々は緑の墓をめぐりて（折句）

深海鮫鯨

蝸の聲は路傍の石に沁む命の歌はかくも眞幸く

丹仙

蝉時雨降る足柄の峠道越ゆれば青き夏富士の見ゆ

弁慶

ありつたけ生きておいでと蝉の殻風透きとほる空透きとほる

真奈

蝉しぐれ空はにじみて盆供養かそけき風のぬけゆく寺院

れん

父恋し母ぞ恋しき盆のくる瓜の馬の背茄子の牛の背

寂

父母の奥津城訪えば周りには白き山百合咲きにけるかも

弁慶

重なりし父母の忌挙げしこの秋はなにやら老いを覚ゆるやわが

蘇生

秋茄子の香りさやかな朝のめしちちははの笑み思い出すかな

弁慶

ちちをやるははと娘もなりゆきて抱く子はわれ似のリニューアルかと

深海鮫鯨

孫とわれよく似ているとひとはいう孫をしげしげそんなものと

蘇生

桃李和歌連作百首歌集

第七四〇一首より七五〇〇首迄

平成一八年六月一日より平成一八年八月一九日迄